



# 特集 さみしくなる漫画

小さい頃に読んだ物語を久し振りにもう一度読む機会があると、なんとも懐かしくさみしくなるものです。しかし、我々だけではなく、漫画も歳月を重ねているのです。今回は、歳月を感じさせ、我々をさみしくさせる漫画をご紹介します。

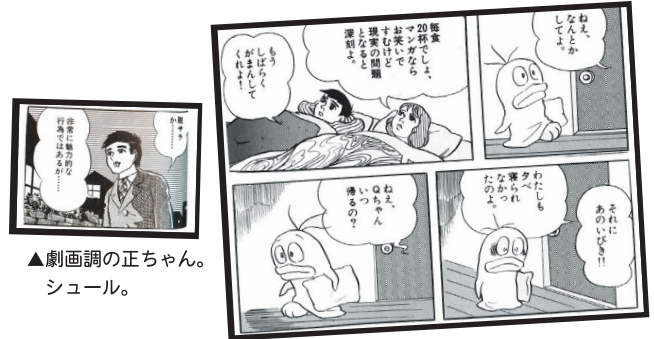
## 劇画・オバQ

藤子F不二雄  
小学館漫画文庫藤子F不二雄異色短編集『ミノタウロスの皿』収録

『オバケのQ太郎』の時代から15年後。Q太郎は久々に人間界に戻り、正ちゃんに会いにきた。だがしかし、子供でなくなった正ちゃんのもとに、もうQ太郎の居場所はなかった……。

藤子F不二雄の異色作のひとつ。あの愛嬌ある藤子キャラたちがばかにリアルな劇画風の絵で描かれているので、読者はオバQ時代との懸隔をいやでも思い知らされる。

ちなみに、作中でたった1コマだけ、かつての児童漫画風の絵柄で描かれたコマがある。その1コマの存在が読者の受ける突き放され感を際立たせている。



▲劇画調の正ちゃん。シュール。

## ひとりずもう

さくらももこ  
小学館 週刊スピリッツで隔週連載中



『ちびまる子ちゃん』の続編である。同名のエッセイの漫画版。小学3年生だったまる子は中学生になった。まる子は、身の回りの、そして自分自身の変化に戸惑いながら成長していく。上記のオバQと対照的に、絵こそ『ちびまる子ちゃん』時代と同じであるものの、内容のほうが非情なまでに異なっている。子供のころ『まる子』に親しんできた人にとっては、かなりショッキングな内容であろう。『ちびまる子ちゃん』の読者としては、古い友達に置いていかれたような気持ちになるかもしれない。

## ヨコハマ買い出し紀行

芦奈野ひとし  
講談社 アフタヌーンKC (全14巻)

つまらない。12年間にわたり連載した漫画だが、その期間打ち切られなかったことが謎なほどつまらない。田舎の日常が延々と描かれるだけで、コマはほとんど背景、事件などちっとも起こらず、もちろん買い出しなんかには行かない。サザエさんのようなほのぼのの空間だ。だがサザエさんのようなループ空間ではなく、連載中に徐々にだが確実に歳月が流れていく。この歳月の概念が存在することで、この空気漫画はその後思いもよらない様を呈するようになる。連載の後半でそれは顕在化する。連載当初子供だったキャラが大人になって主人公のもとを離れたり、仲良しのおじいさんが亡くなったりと、胸につまされる展開が続く。主人公の周りの人間が一人また一人と去っていく最終回付近は、ページをめくるのが苦痛であるほどだ。この味は、『物語』ではなく、ひたすら『日常』を描いてきた本作品だからこそ出せる味だろう。



▲1巻

▶9巻

▶11巻

▲主人公を慕っていた幼い少年は、やがて大人になり、都会へ行き、戻ってこなくなる……。

はみだし  
すてーじ  
人がゴミのようだ。(4月前半のキャンパス)  
⇒そうですね。

(経済・3 匿名希望)